

宮沢賢治の童話を  
落語仕立てで語る

# 賢治寄席へようこそ IV

宮澤哲夫 著



## まえがき 賢治寄席ふたたび (『賢治寄席へようこそ Ⅲ』より再掲)

この『賢治寄席へようこそⅢⅣ』は、前著『賢治寄席へようこそⅠⅡ』の続編です。

お断りをしなければならいことがあります。前著は「三鷹大沢・宮沢賢治の会」会員の皆さんを対象にできなかったものを、地人館 E-books のシリーズに加えていただいたものでした。この『賢治寄席へようこそⅢⅣ』からは、さらに広く賢治愛好者の皆さんがたに読んでいただけると、対象を会員から全国の賢治愛好者の皆さんがたに広げることができました。

この新しいシリーズが、賢治さんの作品を読み返す機会になればさいわいであります。作品を眠らせてはいけません。まさに「物語をして語らしめよ」でございませう。つねに作品を呼び覚まし、何度も読み返し、さらなる賢治さんからの豊かなメッセージを受けとりたいものでございませう。

賢治寄席へようこそ IV 【もくじ】

まえがき 賢治寄席ふたたび 3

口上 8

第十一席 「雪渡り」(前半の部) 四郎くんとかん子ちゃん初冒険 10

第十二席 「雪渡り」(後半の部) 狐の幻燈会 18

第十三席 「雁の童子」(前半の部) やってきた雁 28

第十四席 「雁の童子」(後半の部) 去っていった雁 39

第十五席 「インドラの網」(前半の部) ツエラ高原で 51

第十六席 「インドラの網」(後半の部) インド神話まんだら 63

第十七席 「チュウリップの幻術」(前半の部) 幻術にかかって 74

第十八席 「チュウリップの幻術」(後半の部) 園丁の目から 88

第十九席 「鳥箱先生とフウねずみ」(前半の部) わしは鳥箱先生だぞ 99

第二十席 「鳥箱先生とフウねずみ」(後半の部) ああ不条理劇 110

あとがき 126

【表紙・扉写真】 小岩井農場のチュウリップ

## 口上 （『賢治寄席へようこそ Ⅲ』より再掲）

この度にもぎにぎしくお運びいただき、まことにありがとうございます。この度ここで新しくお耳に達します（お読みいただく）『賢治寄席へようこそⅢⅣ』は、以前に皆さまがたにお届けいたしました『賢治寄席へようこそⅠⅡ』の続編でございます。つねに魅力的な語りで私たち読者を魅了し、深く考えさせてくれる、おびただしい作品を書いた宮沢賢治さんは、状況こそ違いますが、夫となったササン朝ペルシャのシャハリヤール王に、一千一夜も面白いお話を語り続けた、かのシエラザードのイメージと重なってまいります。

無比の語り手賢治さんは、まさにシエラザードに比すべき稀有けうの語り手。一度読めば二度、二度読めば三度と、賢治さんの魅力は尽きることはございません。

いつも申しあげていることではございますが、もしこの賢治寄席を少しでも面白かったとお思いいただきましたら、どうぞ賢治さんの原作にあたって、すばらしさを直接受けとっていただき

たいと切にお願いをいたします。原作に勝るものはありませぬ。

では、賢治さんのさまざまなお楽しみくださらんことを。いざいざ。

## 第十三席 「雁の童子」(前半の部) やつてきた雁

この世界は舞台のようなもの。ここに役者が登場し、さまざまな役割を演じながら、やがて幕が下りて舞台を去っていきます。このようなことを、かのシェクスピアが申しておりました。たしかにこの一生は舞台でございます。しかも一度きりの。

せっかく演技をしても時がたち、幕が下りれば去らなくてはならない。これが役者の宿命であります。役者どころか、私たちもまたそうなのです。

さて今席とりあげますのは「雁の童子」でございます。天からこの地上世界に降りてきて、時期がくればまた天に帰って行く。「来たりて還りゆくもの」として、雁の童子は私どもの前に姿を現しました。考えれば、私たちもそんな意味で、また雁の童子でございます。

この物語の背景は架空の流沙るさとなっておりまして、中央アジアの沙漠地帯と想定しておきます。いつの時代かはよく分かりません。

ある沙漠のオアシスで食事をした「私」という語り手が、巡礼じゆんれいのおじいさんから聞いた話がこ

の作品の内容でございます。ひとりぼっちの旅なので、なかなか退去たちさりがたい思いをしていた私が、黄色と赤のペンキが塗られ、その前には粗末な幡たばのたっている、小さな祠ほらの由来ゆらいをおじいさんに尋ねます。

「……童子のです」という答えに、私は「童子ってどう云う方ですか」とかさねて尋ねて、ここに祭られている、天から降りてきたふしぎな雁の童子の物語を聞くのです。

「沙車さしやに須利耶圭すりやけいという人がございました」とその巡礼が語り始めます。

このあたりでは名門だけれども、落ちぶれてひっそり妻と暮らしているらしい人物です。

この人が、ある明けがた、鉄砲を手にした従弟いとこと野原を歩いておりました。須利耶に「どんなものでもいのちは悲しいものなのだぞ」と慰みの殺生を戒められた従弟は、むっとしたのでしょう、折から空を渡っている雁の列に鉄砲を放ちます。

一発、二発、三発。いや六発です。真つ先の雁は二三べん揺らいだかと思うと、身体から火が燃えだして、悲しい叫び声をあげて落ちてまいります。弾丸は次々に雁にあたり、みな同じように落ちてまいります。ただ七番目の最後の雁にだけは弾はあたってはおりません。

須利耶が驚いたのは、雁がみな人の形に変わっていたことです。「赤い焰ほのおに包まれて、嘆き叫んで手足をもたえ、落ちて参る五人、それからしまいに只一人、完まったいものは可愛らしい天の子供でございます」と賢治さんが書いております。

落ちてくる五人と数が合わないのですが、ここは皆さま、目をつぶってください。それにまだ



ふしぎなことがあります。須利耶がその子に見覚えがあったというのです。

白い髯ひげの老人の姿となった最初の雁は、燃えながら須利耶に手を合わせて、切なく叫びます。ふしぎなことに須利耶圭という名を知っていて「須利耶さま、おねがいでございます。どうか私の孫をお連れ下さいませ」と頼むのです。駆け付けた須利耶は、引き受けますが、いったいどういうことか事情がよく飲みこめません。どうして雁が人間の姿に変わったのか、どんなことがあったのか、それよりも、この人たちは何者なのか。まったくの謎でございます。

「私共は天の眷族けんぞくでございます。罪があつてただいままで雁の形を受けて居りました。只今報むくいを果たしました。私共は天に帰ります」という老人の言葉で素性すじょうが明かされます。

眷族というのなら、この人たちは天に属する人たちです。いわば天人たちです。何かの罪があつて、そのために姿を雁に変えられて天から追放された。それが報いを果たしたので天に帰るといつているようなのです。ようやく贖罪しよくざいを果たして天に帰ることができる、なにか嬉しそうでもあります。

そして「ただ私の一人の孫はまだ帰れません。これはあなたとは縁ゆかりのあるものでございます」とさらにふしぎなことをいい、養育を頼むのです。須利耶とこの天の眷族たちとはどんなつながりがあるのでしょうか。老人は須利耶の頷くのを見届け、手を合わせて地面に頭を垂れ、燃え尽きていきます。他の雁たちも同じように燃えてしまったのです。

こうした夢のような出来事により、一人残された雁の子は、須利耶に育てられることになりま

す。まず名前を付けなくてはなりません。三四日も考えているうちに、もうこの事件が沙車中に広まっていて、皆は「雁の童子」という名を付けていたのです。

「雁の童子」とはなんとという心無い命名でしょうか。天から降りてきた天人かもしれないが、人間の形はしていても中味は鳥なんだ、鳥の雁なんだぞ。畏怖と軽蔑が半ばずつの残酷な命名です。須利耶も奥さんも、しかたなく雁の童子と呼ぶことになります。

天から地上に落ちてきて、ふしぎな縁で人間の養育を受けることになった雁の童子の物語が、これから始まります。どのように物語は展開いたしますか、いくつかのエピソードを皆さまと読んでまいりましょう。

六歳になった童子と須利耶が町を歩いております。春の夕方です。影法師のようにひらひら飛んでいる蝙蝠を追っていた子どもたちが、いきなり二人をとり囲むと、例によって口ぐちに囃し合っています。

「雁の子、雁の子雁童子、空から須利耶におりて来た」

これはまあいいとしても、

「雁のすてご、雁のすてご、春になってもまだ居るか」

捨て子はひどいですね。それに春になっても北に帰らずに、まだここに残っているのか。はやく帰れ帰れと、囃したてたのです。しかも石まで投げ、童子の頬を打ちました。須利耶は童子を庇って子どもたちを諫めますと、子どもたちは詫びたり、無花果を出したりしました。でもこれ

は大人がいるから形だけの謝罪で、本心では悪いなどと思つてはいない悪童たちでしょう。このからかいは、子どもの親たちの心の反映でもあったでしょう。

泣かなかつたのをほめた須利耶に、童子は「わたしの前のおじいさんはね、からだに弾丸たまを七つ持っていたよ」とすがりながら答えます。家長として苦難を一身に引き受けた祖父に較べれば、これぐらい何でもないと、健気けんげにも耐えていたのですね。こないじめの描写に続く、第二の工ピソードは眠つけない童子の苦しみの場面です。

童子の脳がすっかり疲れて、いつまでも眠れず、床の中でもがき苦しむ姿を、賢治さんは、「白い網あみのようになって、ぶるぶるゆれ、その中に赤い大きな三日月が浮かんたり、そのへん一杯にぜんまいの芽のようなものが見えたり、また四角な変に柔らかな白いものが、だんだん拡がって恐ろしい大きな箱になったりする」と、もうなにか病理学かなにかのように、寝付けない童子の脳内をすさまじい筆致ひつちで私たちに伝えてくれます。

須利耶は童子を外の川の傍に連れ出します。「お父さん、水は夜でも流れるのですか」と問い、「水は夜でも昼でも、平らな所でさえなかつたら、いつ迄もいつ迄も流れるのだ」という答えを聞いて、童子はやつと心を静めるのです。どんなに不安だったのでしょうか。童子のこんな話には何か深い訳がありそうな気がいたします。

またこんなことも述べられています。ある日の食事の場面です。蜜で煮た鮎が食卓に出されます。「喰べたくないよおつかさん」と童子がいいます。細かにしている母の顔をじつと見

つめていた童子は、いきなり外に飛び出して大きな声で泣いたのです。どうして泣きだしたのでしょうか。何を思い出したのでしょうか。ふしぎな話です。ふしぎな話がまだあります。

須利耶と童子が馬市を通りかかりました。母馬の乳を飲んでる仔馬が、いきなり引き離されて、馬商人に連れていかれます。仔馬が売れたのでしょうか。驚いて高く声をあげる母馬から遠く離され、「向こうの角を曲ろうとして、仔馬は急いで後肢を一方あげて、腹の蠅を叩きました」と述べられております。理不尽にも母から突然引き離された衝撃と、その驚きや悲しみを、仔馬は蠅を追うために肢を上げるといふ動作でしか表せなかつたと読めて、涙をさそいます。

このときの母馬の黄色い瞳を、童子は横目で見ていたのです。そして須利耶にすがって泣き出しました。馬市から離れて、泣いた理由を聞きますと、荷物をいっぱいつけてひどい山に連れて行き、食べ物がなくなくなると殺して食べるんだらうと答えます。馬たちの運命を予見でもするようなこんな童子の言葉に、須利耶は内心、「少しその天の子供が恐ろしく」思ったと書かれております。また次のような話もあります。

十二歳になった童子は首都の「外道の塾」に入学します。外道は仏教で異教をいうほかに、世俗の学問、たとえば数学や農学などをさすそうです。機を織つてお母さんは学費や小遣を送ります。童子もその期待にこたえて勉学に励んでいたのですが、とうとう天山が雪でまっ白になった秋に、お母さんと一緒に働くといつて家に戻ってきたのです。

驚いた母に叱られ諭され、途中の沼地で作つてくれた蘆の笛を手にして、童子は泣く泣くまた

戻っていきます。その姿が遠く消えたころ、羽音をたてて雁の群れが空を渡って行ったのです。窓からそれを見ていた須利耶は「思わずどきっと」したと書かれております。雁の群れを見て須利耶は何を感じたのでしょうか。ふしぎな描写です。

こんなことがあって、厳しい冬も過ぎました。楊も芽吹き、陽炎がゆらめき、白い花たちが咲き、草地在りすっかり緑に燃え、玉髓の雲の峰が四方の空をめぐる。待ち望んだうらかな春です。そのころ沙車の町はずれの砂の中から、古い沙車大寺の跡が掘り出されたという噂が広まりました。壁に三人の天童子が描かれ、中の一人などはもうまるで生きているようだ、そんな評判がたったのです。

ある晴れた日、須利耶は都の学塾に出向いて、半日ばかり童子を連れだす許可を得ます。二人は雑踏をすぎて歩きながら、青い空を見あげます。「お前がたの年は、丁度今あのそらへ飛びあがろうとして羽をばたばた云わせているようなものだ」と須利耶が口にしますと、「私はお父さんととはなれてどこへも行きたくありません」と童子が答えます。

そして「私はどこへも行きたくありません。そして誰もどこへも行かないでいいのでしょうか」といのです。それに須利耶は「行かないでいいだろう」と何の気もなくぼんやりと答えたのです。

これは誰でも口にする何気ない会話です。でも何かが潜んでいそうなのです。しかも二人は沙の広がつている郊外に、引き寄せられるように向かうのです。そこにはあの沙車大寺の発掘現場があるのです。近寄ってはいけない。何かそんな予感がいたします。そう、何かよからぬことが

起こりそうな。須利耶さん、今ならまだ引き返せます。でも二人はそこに向って歩いていきます。沙の一部が深く掘り下げられて、多くの人がある中に立っております。近づくと、古い壁に色あせた三人の天の童子の姿が見えてきました。須利耶も思わずどきどきとしましたが「なる程立派なもんだ」と感心いたします。そして「あまりよく出来てなんだか恐いようだ」と口にしたのです。ああ、それだけにしてください、須利耶さん。

でもとうとう、「この天童はどこかお前に肖にているよ」と口にしてしまったのです。その瞬間です。なにか笑ったまま童子が倒れかかったのです。

驚いて抱き留める須利耶の腕の中で「おじいさんがお迎いをよこしたのです」と童子は夢のようにに呟きます。「お前どうしたのだ。どこへも行ってはいけないよ」と叫ぶ須利耶に「お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前にお父さんが書いたのです」と童子が話したたこと、それはじつにふしぎなことばかりでした。

なんとそれは童子が地上に降りてくる前の天上の世界、いわば前世の物語だったのです。そこでは童子は須利耶の実の子でした。しかもこの壁の絵は須利耶が画いたというのです。すると須利耶も以前は天に住んでいた天の眷族になります。これは驚くべき話です。

童子は須利耶の腕の中で何かまだ呟いておりますが、ほとんど聞き取れません。須利耶は童子を抱きしめます。やっと眼を開いた、童子がまた呟きます。そしてその話がようやく分りました。どうやら天上では、童子は王に仕えていたらしく、この絵の完成した後に王が殺されたようで

す。それで童子の一族は出家をしたというのです。敵の王が来て寺を焼いたので、みんなは服装を変えて隠れていました。童子には恋人がいたので出家に戻ることをやめようとしたというのです……

ここまで呟きながら語り終わると、童子は須利耶の腕の中で息を引き取りました。終わりはほとんど聞こえませんでした。

こうして天から降りてきた雁の童子は、また天に帰っていきました。人びとが集まってきて「雁の童子だ。雁の童子だ」と口ぐちにいいあっています。そんな騒ぎのなかで、須利耶はただじつと童子を見つめているばかりです。空は青く、人の輪はさらに大きくなります。沙車さしやの町はずれ、古い沙車大寺の壁画を前にしたできごとでした。

童子はどうして地上に降りてきたのでしょうか。童子の一族は罪を得て天人の姿から雁の姿に変えられていたとすれば、どんな罪だったのでしょうか。どうして童子だけ天に帰れなかったのでしょうか。考えればふしぎなことばかりです。

燃えていく老人が須利耶にいった「これはあなたとは縁のあるもの」や、「たしかにその子供に見覚えがございました」と須利耶が思ったこと、それに童子に関するいくつかのエピソードが、ここで急に意味をもって思いだされます。

この雁の童子にまつわるふしぎな話は、オアシスのほとりで巡礼の老人が、「私」に語ってくれた話でした。老人は「私の知って居りますのはただこれだけです」と口を閉じ、物語

は終わります。このかりそめの出会いを深く心に刻み、「私」は老人に厚く礼をのべます。二人は互いに相手をよく知らないのですが、「いずれはもろともに、善逝スガタの示された光の道を進み、かの無上菩提むじょうぼだいに至ることでございます」と別れを告げ、それぞれの道を辿ったのです。人の世、みんな「一期一会いちごいちえ」の出会いであります。では皆さまがた、これでお別れであります。次席はこの物語のいくつかの場面を描いた画廊にも、皆さまをご案内したいと思います。お待ちしております。





空をゆく雁の群れ

## 第十七席 「チュウリップの幻術」(前半の部) 幻術にかかって

うらうらとした春の陽射しがまぶしいほどです。農園をめぐる垣根にはすもの青白い花が咲いておられます。玉髓ぎよくずいの雲は光って四方の空をめぐるっている、こんなある春の不思議なひと時のできごとを、賢治さんは「チュウリップの幻術」という物語にして私たちに残してくれました。

一人の洋傘かさ直なおしが、この月光をちりばめたような緑の牆壁しょうへきに沿って、てくてくと歩いておられます。荷物を背負ってすらりと伸びた長い脚の青年です。今と違って、洋傘は当時は貴重品でしたので、壊れたら何度も修理して使わればなりません。

洋傘直しというのですから、壊れた洋傘を修理するのですが、そればかりではなくさまざまなお物を研ぐこともいたします。

その職業の目印でしょうか、荷物に立てた有平糖あるへいとうでできたような赤白だんだらの小さな洋傘がなかなか印象的で、ハイカラな感じのする登場ぶりです。ああ、有平糖ですか。これはずいぶん昔からある色をつけた砂糖菓子です。この洋傘直しの青年が、この物語の主人公でございます。

ずいぶん派手な登場ぶりですな。

垣根の隙間から農園の中を覗きこみ、農園の入り口できくつと曲がり、中に入って荷物を下ろし汗をぬぐっているのですが、こんな主人公の動作を、物語では、

《なぜそうちらちらかきねのすきまから農園の中をのぞくのか》

《なぜ農園の入口でおまえはきくつと曲るのか。農園の中などにおまえの仕事はあるまいよ》

《荷物をおろし、おまえは汗を拭いている。そこらに立ってしばらく花を見ようというのか。そうでないならそこらに立っていけないよ》

と三回の呼びかけの言葉で読者に想像させておきます。

動作だけでなく、主人公の心の中や、なにか警告まで告げていて、これは主人公への警告なのか読者への暗示なのかよく分らない不思議な書きかたです。これが主人公の紹介の部分とすると、次が副主人公の出現の部分となります。

青い作業服を着て、移植どういつとうひごてを手にし、汗を拭きながら独乙唐檜どういつとうひの茂みの陰から出てきて「何のご用ですか」と声をかけるのがこの農園の園丁です。たぶんその茂みの奥に事務所かなにかがあるのでしょうか。この物語はこの二人だけで進行いたします。

洋傘直しは洋傘を直すだけでなく、鋏などの刃物も研ぎます。「そちらの方もいたします」と告げますと、園丁は主人に聞くために姿を消します。どうやらこの園丁も同じ年齢ほどかと思われず。園丁が姿を消すと不思議に太陽もぼつと消えるのです。

もう何時ごろでしょうか、西に陽も傾いております。雲の間から光の棒が「向こうの山脈のあちこちに落ちてさびしい群青の泣き笑い」をしております。さきほどまで光っていた赤白だんだらの派手な有平糖の洋傘もすっかり色あせて、いまはただの赤と白のキャラコのようになっているだけです。

風が出て、不意に太陽が顔を出すと、チュウリップの畑に陽がさし、まっ赤な花がふらふら揺られて光ります。園丁が急に出てきて、農場の所有物でしょう、両手に抱えたものをガチャと置きます。

五点のうち、よじれた選定鋏せんていばさみは除外して、「こちらが八銭、こちらが十銭、こちらの鋏は二丁で十五銭にいたして置きましょう」と値段を決めます。剪定鋏、刈込鋏、手鋏でしょうか、四点で三十二銭ですから、相場よりはおそらく安かったのでしょう。井戸のある場所を教えて園丁はまた姿を消します。

洋傘直しが道具箱から缶を出して井戸まで水をとりにいくと、陽がかげり風が吹き、目印のキャラコの洋傘が揺れます。水をもって姿を現すとまた陽が照り赤い赤い花が光ります。不思議なことに、場面に人物が登場したり退場したりするたびに、天候や周囲の情景の描写が微妙に変化するのです。

鋼砥かなどの上で金剛砂こんごうしゃはジャリジャリと音をたて、チュウリップはふらふら揺れ、陽がまた射して赤い花は光ります。洋傘直しが水をはり研ぎはじめますと、「秋の香魚あゆの腹にあるような青い紋

がもう刃物の鋼に」現れてまいります。落ち鮎の腹の、あのくすみかけた錆び色です。ひばりの声も高い空からチーチクチーチクと落ちてきて、あたりは明るく輝くのどかな春五月のひる下がりでございます。

園丁が唐檜の陰から現れます。今度は少し顔を赤らめて、私物らしい西洋剃刀かみそりの依頼をいたします。三時の昼休みまでに研ぐことになります。遠くの山脈も青く望まれ、雪を頂く死火山も「土耳トル古玉コたまのそらに」くつきりと浮きあがっております。

先ほどの農業用の鋏などと違って、今度は西洋剃刀です。ていねいに研ぐのでしょうか。合せ砥あわせどを出し、水をかけてから、滑らかな石でしずかに練り始めます。パチツと石をとりますとじつとそれに目を凝らすのです。それはまた、どこからともなく聞こえる例の声で《なぜその石をそんなに眼の近くまで持つて行ってじつと眺めているのだ》と、読者にその動作を想像させております。

さらに《石に景色が描いてあるのか。あの、黒い山がむくむく重なり、その向こうには定めない雲が翔け、溪たにの水は風より軽く幾本の木は険しい崖からからだを曲げて空に向かう、あの景色が石の滑らかな面に描いてあるのか》と続きます。

こんな景色をじつと眺めていたのですね。まあなんとという詩情豊かな洋傘直しではありませんか。雲は空を翔け、黒い山が重なり合い、谷の水は走り、険しい崖から空に向って曲がった何本もの木、まさに一幅の日本画か、盆栽の世界ではありませんか。

石を置き剃刀を手にとりますと、剃刀は青空を写して青くキラツと光ります。ポタポタと汗が落ちます。畑の黒土はわずかに息をはき、風に近くの花も強くゆれ、遠くの唐檜も動きます。ていねいに剃刀を調べ、やっと仕事のすべてが終わりました。ゆっくり立ちあがった洋傘直しはチュウリップに一足近づいたそのとき、やっと休憩時間になったのか、まっ赤に顔をほてらした園丁が飛んできます。

農場で使う鋏の代金三十三銭を受けとった洋傘直しは、園丁の剃刀の代金は「お負けいたして置きましよう」と受け取りません。恐縮した園丁がせめてお茶でもと誘っても辞退いたします。「そんならまあ私の作った花でも」と花壇に誘うのです。

二人がうっこんこの畑に近寄ったとき、唐檜の向うに主人らしい縞のシャツがちらつとして、園丁が声をかけようとしたが、すぐに姿を消しました。農場の主人でしょうが、物語にはまったく参加しておりませんので、この物語の登場人物はわずかこの二人だけです。

ご存知でしょうが、「うっこんこの」とはチュウリップの別名で、漢字では「鬱金香」と書きます。園丁はまず自慢のチュウリップを見せたかったのでしよう。

黄色と橙の大きな斑ふちはアメリカからの直輸入。こっちの黄色のは見ていると額ひたいが痛くなる。また赤と白の斑のは昔の海賊のチョッキのようだ。それに、まっ赤な羽二重のコップは半分透明なことで有名だ。こんなことをいろいろと園丁は説明してくれるのです。洋傘直しも「赤い花は風で動いている時よりもじっとしている時の方がいいようですね」と感想を述べております。外か

ら来た人が、顔きながら聞いてくれたり見てくれたりするの、説明する園丁にもうれしいことなのでしよう、ますます力が入ります。

そして園丁は小さな白のチュウリップを指さして「此処では一番大切なのです。まあしばらくじっと見詰めてごらんさい」というのです。しばらく見入っていた洋傘直しは、黙ってしまいました。

「ずいぶん寂かな緑の柄えでしょう。風にゆらいで微かに光っているようです。いかにもその柄が風に軋しなっているようです。けれども実は少しも動いて居りません」と園丁はいます。緑の花柄は風で微かにゆらいでいるように見えても、ほんとうは動いてはいないのです。どうも不思議です。

「それにあの白い小さな花は何か不思議な合図を空に送っているようにあなたには思われませんか」と園丁が続けます。風でも花は動いていないばかりか、不思議な合図を空に送っているのです。黙って見入っていた洋傘直しがいきなり叫んだのです。

「ああ、そうです、そうです、見えました」

なにを感じたのでしょうか。なにを見たのでしょうか。この時、洋傘直しは園丁とともに一歩、異界に足を踏み込んだのではありませんか。妖しいチュウリップの幻術という世界に。でも洋傘直しは気づきません。この時から世界の様子が一変いたします。ひばりの羽の動かしかたも鳴き声も違ってきたのです。

「あの花の盃の中からぎらぎら光ってすきとおる蒸気が丁度水へ砂糖を溶かしたときのようにユラユラユラユラ空へ昇って行くでしょう」、園丁が続けます。

「そら、光が湧いているでしょう。おお、湧きあがる、湧きあがる」、もう園丁の言葉はまるで熱に浮かされたようです。「花の盃をあふれてひろがり湧きがりひろがりひろがりもう青ぞらも光の波で一ぱいです」

いま目の前で、白いチュウリップから光の波が湧きあがっています。「湧きます、湧きます。ふう、チュウリップの光の酒。どうです。チュウリップの光の酒、ほめて下さい」

二人の目の前で光の酒が湧きあがっているのです。なんとという光景でしょう。「ええ、このエステルは上等です。とても合成できません」、洋傘直しが叫びました。

これにすばやく反応したのが園丁です。「おや、エステルだって、合成だって、そいつは素敵だ」と叫んで、「あなたはどこかの化学大学校を出た方ですね」と訊ねます。それに洋傘直しは「いいえ、私はエステル工学校の卒業生です」と応じます。それにまた園丁が「エステル工学校。ハッハッハ。素敵だ」と笑い声で応じました。

どうもすっかり気が合ったのですな。意気投合というのか、相手が自分と同じぐらいに話しが交せることを知った喜びです。恐らくは同じぐらいの年齢でしょうし、お互いが相手を認め合った瞬間で、「おぬし、なかなかやるな」とでもいいたい気分だったのでしょうか。ここまでくれば後はもう若い気の合ったものたちの少し高揚した世界です。



エステル工学校なんて洒落た名は多分、賢治さんの即興の校名でしょう。賢治さんはこの作品を書いたときには、花巻農学校の教師でしたので、農学校ならぬ工学校になったのでしょうか。

「いい酒です。貧乏な僕のお酒は又一層に光っておまけに軽いのだ」なんていいながら二人は健康を祝して盃をあげます。チュウリップの光の酒を吞みます。花卉の盃には次から次へとエステルが湧きあがり、波をたて渦をまき、溢れて流れます。

「いくらこぼれた所でそこら一面チュウリップの酒の波だもの」と園丁がいえば、「一面どころじゃありません。そらのはずれから地面の底まですっかり光の領分です」と洋傘直しが応じます。みるみる広がる異空間、それが、おお、広がる、広がる。空から地面の底まであらゆる世界が光の領分になったのです。この光の渦の中で、若い二人は酔いしれるのです。

ここばかりではありません。向こうの畑も光の酒につかつて花椰菜はなやさいやアスパラガスも立派に光っています。「立派ですね。チュウリップ酒で漬けた瓶詰」と洋傘直しは感嘆します。でもこの後で不思議なことをいうのです。

ひばりもこの光の酒に酔ったのか、姿を見せません。それを「自分で斯こんな光の波を起して置いてあとはどこかへ逃げるとは」とか、「こら、ひばりめ、降りて来い。ははあ、やつ、溶けたな」だとか、「あの甘ったるい歌なら、さつきから光の中に溶けていきましたがひばりはまさか溶けませんまい。溶けたとしたらその小さな骨を何かの網で掬い上げなくちゃ」なんてひばりを話題に冗談をいい合いです。もう二人は言葉もぞんざいになってきていることがわかります。たがいに

気心が知れるにつれて、光の酒に酔いも高まり、いつそうの昂揚感を感じているのですね。

あたりの景色も揺れております。向こうの唐檜も踊り出そうとしているようなのです。「あいつはみんなで、一小隊はありましよう。みんな若いし擲弾兵です」と園丁が説明します。昔の軍隊用語の擲弾兵とは、近距離から携帯の擲弾筒を操作する歩兵です。小隊はふつう二十人から三十人ぐらいで編成されますので、若い擲弾兵とくらべられた唐檜は、二十本から三十本もの若い木なのでしよう。

揺れて踊っているのを心配する洋傘直しに「なあに心配ありません。どうせチュウリップ酒の中の景色です。いくら跳ねてもいいじゃありませんか」と園丁は大目に見ることにしたようです。そして「いい酒だ。ふう」です。

向こうですももも踊っております。「すももは牆壁<sup>しようへき</sup>仕立です。ダイヤモンドです。枝がななめに交叉します。一中隊はありますよ。義勇中隊です」と園丁の説明です。

枝が斜めにカットされた整枝の樹形からダイヤモンドが連想され、外敵の侵入を防ぐ防御の意味も含んでいるのでしょう。一中隊というのですからおよそ百本ものすももがあるというのでしょう。義勇中隊とは正規の軍隊ではなく、民間の有志が組織した軍隊です。時代を反映して軍隊用語が使われておりますが、誰でも普通に使っております。

園丁が「あの梨の木どもをご覧なさい」というので、目をこらしますと、整枝されたばかりの梨の木が並んでおりますが、まだ枝ぶりが整ってはおりません。「まるで蛹の踊りです」なんて

園丁がいますので、すっかり気落ちしたのか石のように固まってしまいました。

あわてて園丁が「おおい、梨の木。木のまんまでいいんだよ」といっても機嫌は直りません。それに「仲々人の命令をすなおに用いるやつらじゃない」などといわれたのですから、なおさらです。もうすっかり化石です。

「それより向こうのくだもの木の踊の輪」と洋傘直しが指さします。まん中できんきん調子をとっているのは桜桃おうとうではなく、油桃つばいもだと園丁が教えてくれます。巴旦杏はたんきょうやまるめるも上手に歌っております。行つて仲間に入りましょう。それで二人で「おおい、おいらも仲間に入れろ」と走り出します。

いきなり洋傘直しが「痛い、畜生」と目をおさえます。「眼をやられました。どいつかにひどく引つ掻かれた」のです。やはり参加を断られました。連れてきたお客さんが怪我をしたとなれば、立場上、園丁も黙っているわけにもいきません。

「どいつも満足の手のあるやつはありません。みんなガリガリ骨ばかり」と園丁がいったとたん、もう「すっかり崩れて泣いたりわめいたりむしりあつたりなぐつたり」の状態に世界が一変してしまつたのです。

園丁の言葉をきっかけにして、これまでの楽しい踊りや歌の世界は、もう大混乱です。「あんまり冗談が過ぎたのです」と、いまさら園丁が後悔しても、もう元には戻りません。洋傘直しも「ええ、斯う世の中が乱れては全くどうも仕方ありません」なんていうばかりです。もう言葉もあり

ません。

そしてとうとう、「そら、火です、火です。火がつきました」。チュウリップ酒に火がはいったのです。「いけない、いけない。はたけも空もみんなけむり、しろけむり」の言葉通り、もうあたりは白煙です。パチパチパチパチと燃え上がりました。

「どうも素敵に強い酒だと思いましたよ」と、白いチュウリップから湧きあがった魔性の酒の正体をこのとき洋傘直しは覚ったようです。いやあの白いチュウリップそのものが幻術そのものであったのかもしれない。じっとその花を見つめた瞬間からもうこの幻術に捉えられていたのです。でももうその魔法はたった今、解けてしまったようです。

「どうも素敵に強い酒だと思いましたよ」

「そうそう、だからこれはあの白いチュウリップでしょう」

「そうでしょうか」

「そうです。そうですとも。ここで一番大事な花です」

このときのこんな二人の対話を聞いておきますと、もうすっかり気落ちして、ぼんやりとした、気が抜けてしまったようには思われませんか。あの昂揚感はどこにいったのでしょうか。魔法の一時は終わりました。

「ああ、もうよほど経ったでしょう。チュウリップの幻術にかかっているうちに。もう私は行かなければなりません。さようなら」と洋傘直しは別れを告げ、園丁も「そうですか、ではさよ

うなら」と言葉返すばかりです。そっけない挨拶ぶりです。これまでの二人のあの昂揚感も  
うどこにも感じられません。

二人はもう饗宴きやうえんの刻ときの過ぎたのを知ったのです。洋傘直しはよろよると、有平糖の広告つきの  
荷物を背負い、妖しい花を横目で見ながら、すももの垣根の入り口にまっすぐに歩いて行きます。  
見送る園丁の顔色も蒼ざめ、やがて唐檜の茂みに姿を消します。「太陽はいつか又雲の間にはい  
り太い白い光の棒いぐさじの幾条を山と野原とに落とします」と賢治さんはこの物語を終わらせておりま  
す。

夕暮れが近いのでしよう。二人がチュウリップの酒に酔いしれていたのはどれほどだったのだ  
でしょうか。振り返りながら立ち去る農園ももう静まりかえっております。チュウリップの畑もそ  
のままに咲き乱れ、白煙をあげて燃えたはずの果物の木たちも整枝されたそのままでしんと固  
まって並んでいるのです。あっけなく現実の世界は戻ったのです。一瞬の歓楽かんらくのあとのわびしさ  
です。まぶしい世界は消滅し、ふたたび元の世界に帰るのです。

二人の若者にはまた日常の生活が待っています。洋傘直しも仕事を探して歩いていくのでしょ  
うし、園丁もまた農作業が待っているはずで。

まばゆいばかりの光があふれ、花や植物の芳しい香りが漂い、葉のざわめきや風の音やひばり  
の啼き声など、光や音に満ちた世界。そんな世界の中の、二人の若者の白昼夢の体験を、私たち  
読者に迫体験させてくれ、また夢幻の世界に誘いこむ、なんとも妖しい物語でした。

この賢治さんの「チュウリップの幻術」にかかって、しばらくの「楽しき刻」を過ごした私たちも、これにて「おしまい」であります。次席は、園丁の目からもう一度見直したり、この賢治さんの夢を育んだ農園を訪ねることといたしましょう。ご機嫌よろしう、お過ごしください。では。

## あとがき

前著『賢治寄席へようこそⅡ』と同じように、本書も賢治作品を広く皆さまがたに楽しんでいただけるように、一つの作品を「前半の部」と「後半の部」に分けて一席としました。前半では物語の流れを概観し、後半では、思わぬものがそこから見えてくるのではないかと期待しながら、違った角度からの読み直しの試みをいたしました。作品じたいから離れてしまった感もいたしましたが、それは楽しみかたの一つだとお許しいただきます。

各席の長さは一定しておりません。そのため、Ⅲ部、Ⅳ部でバランスのとれるように、それぞれの部のなかで、短かなものから長いものへと配列してあります。ただ、作品はそれぞれ独自の価値をもっておりますので、その長短と作品の優劣とはまったく関係はございません。

本書も前書と同じように、くだけた表現による高座形式をとりましたので、注記は特に記しておりませんし、学説での論者のお名前も失礼させていただきました。いろいろな方面からのご叱責もございましょうが、今回もまたお見逃し願います。

なお本書の作品引用部は現代語表記の『宮沢賢治コレクション1～5童話』2016～17年（筑摩書房）によりました。なおルビは適宜、省略・補足いたしました。

令和4年4月

宮澤 哲夫





地人館 E-books デモ版

\*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

---

## 宮澤哲夫 (みやざわ てつお)

---

1935 (昭和 10) 年 長野県松本市生まれ

早稲田大学第一文学部英文科卒業

東京工業高校 (現・日本工業大学駒場高校) 勤務 (1961~2000)

宮沢賢治研究会会誌『賢治研究』編集委員 (1992~2002)。

宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事 (1999~2002 / 2009~12)

鎌倉・賢治の会会長 (2005~14)・現顧問

三鷹大沢・宮沢賢治の会主宰 (2015~)

[著書]

『宮澤賢治 童話と〈挽歌〉〈疾中〉詩群への旅』蒼丘書林 2016

『賢治寄席へようこそ』I・II・III 地人館 E-books

[受賞]

第3回宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞 2018

---

## 賢治寄席へようこそ IV

---

著者 みやざわてつお  
宮澤哲夫

初版発行 2022年4月30日

発行 ちじんかん  
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2022 Tetsuo Miyazawa